

[30] ゲームの達人 パトリック・デュボン

1995年3月31日 東京新聞 夕刊

パリ・オペラ座バレエが来日中である。

ここは個性的な踊り手が多いが、わけても芸術監督のパトリック・デュボンのスター性は、世界のバレエ・ダンサーのなかでもちよつと類がない。

昔からパリ・オペラ座バレエのトップというのは華やかな人が多かった。もとはと言えばルイ十四世のバレエの先生だったポーションが、バリ・オペラ座バレエが制度化されるにおよんで劇場の総指揮にあたったわけだから、宮廷生活の雰囲気を身につけていたのだろう。

十七世紀の末に芸術監督(メートル・ド・バレエ)だったルイ・ペクールという人は、社交界のもてもて男で、ある時、さる將軍と貴婦人の愛を争うはめになった。具合の悪いことに、二人は彼女の控えの間で鉢合わせしてしまう。將軍はさっそうとしたペクールを見て軍人だと思い「君はこのコール(隊)かね」とたずねた。ペクールは「閣下が長らく仕えておいでのコール(体)でございます」と答え、このエスプリが社交界で大評判になったという。フランス語のコール corps とこの言葉の二重の意味もてあそんだわけだが、実のところは、ペクールはオペラ座でコール・ド・バレエ、踊り子の隊列を指揮していたのだ。

十八世紀のガエタン・ヴェストリスも威勢のいい男で、人気も高かったが、言うことも不遜。「ヨーロッパには偉大な男は三人しかない。フリードリッヒ大王とヴォルテール氏、そして私だ」という名文

[30] ゲームの達人 パトリック・デュボン

1995年3月31日 東京新聞 夕刊

句を後世に残したが、これにはさすがに世の人も首を傾げたらしい。

* * *

当代のデュボンを見ていると、こういう大先輩たちを思い出す。というのも、彼もまたとにかく目立つ人だからである。バレエ学校の時代には「オペラ座のアンファン・テリブル」と異名をとった。コクトーの小説の『怖るべき子供たち』のことで、その主人公たちのように美貌と才能にあふれ、凡庸な世俗を見下して傍若無人にふるまうということである。それでいて成績はつねにトップだった。

学校を卒業して入団したのが十六歳。翌年、国際ヴァルナ・バレエコンクールで金賞とグランプリをダブル受賞する。その後、パランシンの『放蕩息子』、ノイマイヤーの『ヴァツラフ（ニジンスキー）』、ベジャールの『ボレロ』などを踊って話題となり、主役クラスのエトワルに昇進したのが八〇年。二十一歳というオペラ座最年少記録である。

とはいっても、いつも一番でなければ気の済まない性格は、たしかに舞台人でなければちょっとテリブルであったかもしれない。日本で三年ごとに開かれる世界バレエ・フェスティバルでも、並みいる世界のスターたちのなかで、彼デュボンだけは、舞台でもパーティーでも、特別な存在であることを印象づけずにはおかないのだ。しかし飛び切りの笑顔と人をそらさぬ機転で、ふしぎに不快に感じさせない。

* * *

〔30〕 ゲームの達人 パトリック・デュボン

1995年3月31日 東京新聞 夕刊

そんな彼も、ヌレエフがパリ・オペラ座バレエの芸術監督に就任した八三年からの数年は、いささかうつとうしい気分だったのではないかと思う。どちらも人にゆずらぬ天才肌の人間だというだけでなく、芸風もメソードも作品の好みもまったく違っていったからだ。デュボンはフランス風に軽妙で明るい、ヌレエフはロシア風にダイナミックで、舞台の作りも重厚なのを好んだ。おそらくはそういう葛藤もあって八七年、デュボンはバリを去ってナンシー・バレエの芸術監督になる。

九〇年に彼がパリ・オペラ座の芸術監督になった時、オペラ座にまたフランスらしさが戻ったと喜んだフランス人は多かったにちがいない。事実、今のパリ・オペラ座バレエは、企画にも舞台にもまたダンサーたちの表情にも、エスプリとエレガンスがあふれている。

なかでもデュボンの舞台はいつも観客相手のゲームである。なにしろ茶目っ気たっぷりな仕組んであるから、かなわない。そうは乗せられてなるものと構えていても、いつも気がつくど熱狂的に拍手させられていて、くやしい思いをする。今度こそは、と毎回思っ劇場にでかけるのだが…。